

## 結核性腱鞘炎の一例

昭和29年7月12日受付

信州大学医学部 丸田外科教室  
武田 定衛

## A Case of Tuberculous Tenosynovitis

Sadae TAKEDA

Department of Surgery, Faculty of Medicine, Shinshu University

(Director: Prof. K. Maruta)

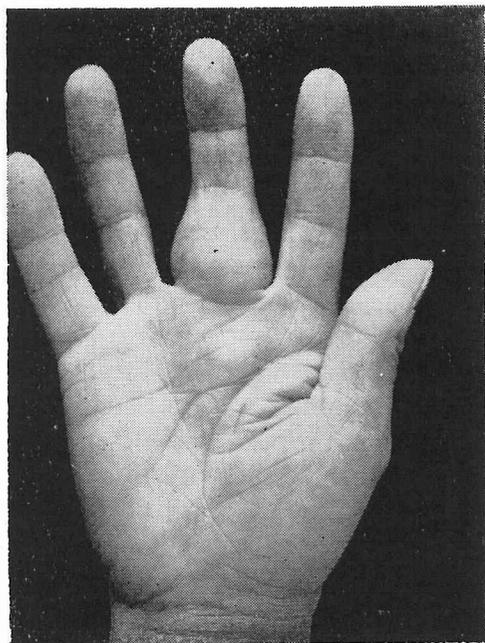
A man, 52 years old, was operated in his right middle finger which showed spindle-shaped swelling. This was tuberculous tenosynovitis with numerous rice bodies.

症例。原田某。52才。男性。昭和26年秋から肺結核の診断の下に療養中である。昭和24年1月頃より、右中指第Ⅰ節内側に疼痛を欠如せる軽度の腫脹が生じ、次第に増大して、時に局所の熱感及び軽度の疼痛を訴えることもあり、昭和24年秋某医にガングリオンと診断されたと云う。昭和26年1月に至り腫脹は漸次増大して右中指根部より手掌に及んだが軽度の運動障害の他には特に愁訴もないままに経過した。

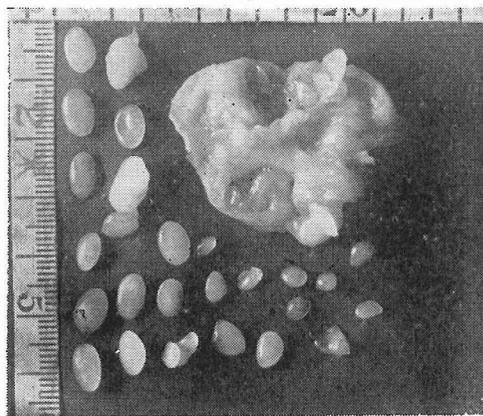
局所々見。右中指第Ⅰ節内側に鳩卵大の腫脹を認め表面の皮膚は少々肥厚し波動を証明する。この腫脹は右中指根部より更に手掌に及んでいる。疼痛も発赤もない。腱鞘水腫の診断の下に手術を施行した。

手術所見。局麻の下に先づ右中指第Ⅰ節内側の腫瘍を剔出した。腫瘍壁は浅指屈筋と癒着していたが之を剝離剔出した。腫瘍内には米粒体が充満していた。次で第Ⅱ掌骨に一致せる部の同様の腫瘍は浅深指屈筋腱を圍繞し、之等の腱と強く癒着して完全な剔出は困難な為、壁の一部を残して剔出した。術後は右中指第Ⅱ節より末梢に知覚鈍麻があつたが徐々に恢復し、術前からの軽度の運動障害も漸次恢復治癒した。

組織学的所見。腫瘍壁は米粒体の形成を伴つた壊死層と、之を囲む組織球性細胞壁からなり、更に深く多数の結核結節が存在し、その附近の筋線維には所謂蠟様変性乃至壊死の像が認められた。



〔第一図〕



〔第二図〕